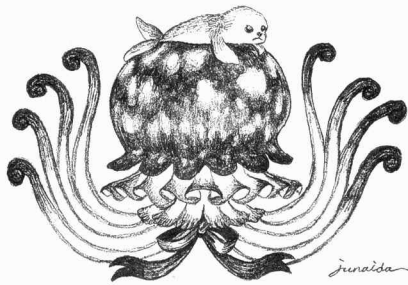


朝日 歌壇 俳壇



「日曜日のブローチ 22」 junaida

うたをよむ 俳句甲子園での注目句

村上 頼彦

八月二十二日から二十四日まで、松山市で第二十八回俳句甲子園全国大会が開かれ、私も審査員として参加した。三十二チームが俳句の出来栄をデイベートで競い合い、神奈川県立横浜翠嵐高等学校が初優勝を果たした。

個人賞は学習院女子高等学校一年・本間まどかさんの句が最優秀賞に選ばれた。天に地に鶴の尾の触れずあり

鶴の尾の上下動を格調高い措辞で大らかに詠み切ったことが評価された。

この最優秀賞の選考会は、大会初日に行われた。事前に提出された句は千二百余。そこから十三人の審査員が一押しの一語を決めて持ち寄り、盛んに意見を交わした。その過程で、俄然輝きを増してくるよう感じられたのが、この「天に地に」の句だった。最終的に全員の承認の上でこの句に決まってみれば、最初からそうなるのが当然であったかのよう

に、堂々とした風格を備えた句に見えてきたから不思議だった。採まれることでもしれない。

(蘭風 圭幸、俳人)

堀本裕樹・桃山鈴子著「六四五七五 虫の絵と俳句」 50の名句に、俳人の解説・鑑賞文と画家の細密画を配した総カラーの画文集。俳句は、「蝶 ルリタテハ」の項では高浜虚子の「山国の蝶を荒しと思はずや」を、「蜂 ムモンホソアシナガバチ」の項では鷹羽狩行の「蜂が来る火花のやうな脚を垂れ」を採りあげている。(毎日新聞出版・3300円)

風信

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選考が添削する場合があり。郵便での投稿は無地のほかはき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿でき

小林 貴子 選

嫌らしい残暑いまだに残暑かな
(筑西市) 大久保朝一

くつし字のやうに上手の踊り過ぐ
(宮津市) 高橋 智子

仏壇の妻に裸を見られけり
(西条市) 稲井 夏灯

道元よし鯨もよしと耕衣の忌
(和歌山市) 見奈美輝彦

べらぼうな暑さめ今日も外回り
(深谷市) 高木 昭子

開くとき花の香りの日傘かな
(今治市) 横田青天子

すりすらとカンナ伸びるやすりすら
(東京都品川区) 萩野谷雅樹

一本の神々しくも毒きのこ
(西宮市) 平田 あい

六時だよ朝顔日記書くんでしょ
(川西市) 糸賀 千代

首痛も楽し至近の大花火
(朝霞市) 岩部 博道

【評】一句目、暑さにも、地球沸騰化を認めない指導者にもあきれ。二句目、うまくない踊り手は金釘流だ。三句目、遺影と偶然目が合い、「これは失礼致しました」と。四句目、俳人の永田耕衣は道元と鯨を愛し、忘れられない句を残した。

長谷川 耀 選

太き骨褒めらるる母近きし秋
(下田市) 森本 幸平

幾億のしかばねに風秋の蟬
(富士市) 村松 敦規

夏といふ文字はヨットに似てるかな
(いわき市) 渡辺真由美

桃ふたつ赤子がふたりあるやうな
(藤沢市) 原島 吉光

身に暑さ心に寒さ夏終る
(長崎市) 下道 信雄

日中の汗の便座に休らはず
(下関市) 内田 恒生

この墓が会津八十八草の花
(大津市) 中村 良一

トーストにジャリとバタ塗る秋の朝
(大阪府豊能町) 岡部 弘道

入道雲一つあれども秋の空
(山口市) 林 朗

ためきと思ひもよらず熊野筆
(東京都新宿区) 岩本 朗

【評】一席。死んで骨をほめられる。苦勞の数々が慰まれる。二席。何と凄絶な数。もうすぐ安らかな秋がやってくる。三席。波の上に何かが立っているような。両者の面影が似ているのだ。十句目。毎朝、化粧に余念ない人よ。ためきに感謝。

大串 章 選

銀漢や我が在るかぎり父母在りぬ
(長野市) 縣 展子

勳章のやうな傷痕生身魂
(加古川市) 森木 史子

鬼灯を鳴らして遊ぶ卒寿かな
(横浜市) 青木 優子

煙突に昭和の歴史夏の月
(芦屋市) 正井 健一

落蟬や葉に成るのはあと少し
(筑紫野市) 二宮 正博

軍歌しか歌はぬ父よめくめ酒
(高松市) 島田 章平

言問へど真実が好きなき蝸牛
(前橋市) 萩原 葉月

熱帯魚ガラスの中の平和かな
(久留米市) 塚本 恭子

蚯蚓鳴く電波時計の電池切れ
(川崎市) 大野有之介

峡の田の今も継がれて稲の花
(多摩市) 田中 久幸

【評】第1句。私が生きている限り父母は胸中で生きている。銀河を見上げ彼の世の父母を思う。第2句。「勳章のやうな」が胸に響く。「二十八年前人工心肺で心臓手術」と付言あり。第3句。卒寿は90歳。和やかに余生をお過ごしください。

高山 れおな 選

弾き終へてまなぶたひらく夜の秋
(久留米市) 川北 敦子

秋麗我が星回り陽の昇る
(高槻市) 舟引 康之

風の中を吹く風のある厄日かな
(横須賀市) 丹羽 利一

西瓜描く鮮やかにガザいのち在り
(東京都杉並区) 漆川 夕

きたきちのきれいな色で死んでをり
(和歌山県串本町) 前田 三紀

屋敷覚めまだ入院中と気付く
(玉野市) 北村 和枝

晩年といへど明日あり九月来る
(奈良県田原本町) 小林 博明

分去れのとらざりし道秋蛭
(さいたま市) 伊達 裕子

太陽族棺の中でもサングラス
(岡崎市) 澤 博史

歩く人炎天に溶け消ゆる街
(三鷹市) 中田 祐子

【評】川北さん。弾き終えたのはピアノかヴァイオリンかチェロか。情緒纏綿。舟引さん。「我が星」はもちろん地球だ。丹羽さん。不安な気分を具象で表現して巧み。漆川さん。西瓜はパレスチナ旗と同色ゆえに、抵抗や連帯の象徴とされる。